

鉾留立聞環状鏡板付轡の意義

大 谷 宏 治

要旨 鉄製環状鏡板付轡の中で、立聞に鉾留立聞を採用するものがいくつか存在する（鉾留立聞環状鏡板付轡）。この鉾留立聞は、まず金銅装花形鏡板付轡・杏葉など金銅装馬具に取り入れられ、その変化を受け、小型矩形立聞環状鏡板付轡などの鉄製馬具にも取り入れられ、鉾留立聞環状鏡板付轡が創出されたと考えられる。また、鉾留立聞環状鏡板付轡の出現する時期が6世紀末～7世紀前半（TK209型式後半・飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期）で、金銅装馬具生産の再編期と同じ時期であることから、この馬具生産者集団の再編に伴い円環轡の工人集団も再編され、金銅装馬具生産に関わり、鉾留技術を習得し、鉾留立聞環状鏡板付轡を生産した可能性がある。

キーワード：鉾留立聞環状鏡板付轡、小型矩形立聞環状鏡板付轡、金銅装馬具、馬具生産工人集団の再編

1 はじめに

鉄製環状鏡板付轡（以下、円環轡）の中で、立聞孔をもつ大型矩形立聞や鉸具造立聞ではなく、面繫のベルトを直接立聞に鉾留する（鉾留立聞）円環轡（以下、鉾留立聞円環轡）が日本列島内で数例出土している。このような特殊な事例はあくまでも数多くの円環轡の中の特異な事例として等閑に伏すか、積極的な評価を行うかに分かれるだろう。ここに取り上げる鉾留立聞円環轡は等閑に伏されてきた感は否めない（註1）。

しかし、鉾留立聞は金銅装花形鏡板付轡・杏葉、金銅装心葉形杏葉などTK209型式期（註2）以降金銅装鏡板付轡・杏葉に積極的に採用されている。筆者は東海地方の馬具や瓢形円環轡を扱うために円環轡を全国的に集成するなかで、ここで取り上げる鉾留立聞円環轡も金銅装轡・杏葉における鉾留立聞の採用とほぼ時を同じく出現し、金銅装馬具における立聞変化と軌を一にしている可能性が高いことがわかった。したがって、この円環轡の中の特異な事例は、古墳時代後期末から終末期の一時期の社会的情勢をしめす特徴的な遺物として考え、検討を加えたい。

2 鉾留立聞環状鏡板付轡の事例について

まず、その評価を行う前に鉾留立聞円環轡についてみておこう。管見では、全国で次の4例が確認できた（註3）。筆者が集成できた円環轡は約1,100例であり、国内・朝鮮

半島で円環轡はさらに多くが出土していることからこの他にも数例は存在する可能性が高いが、先学の研究に取り上げられていないことを考慮すると、この鉾留立聞円環轡が急増することはないと考える。

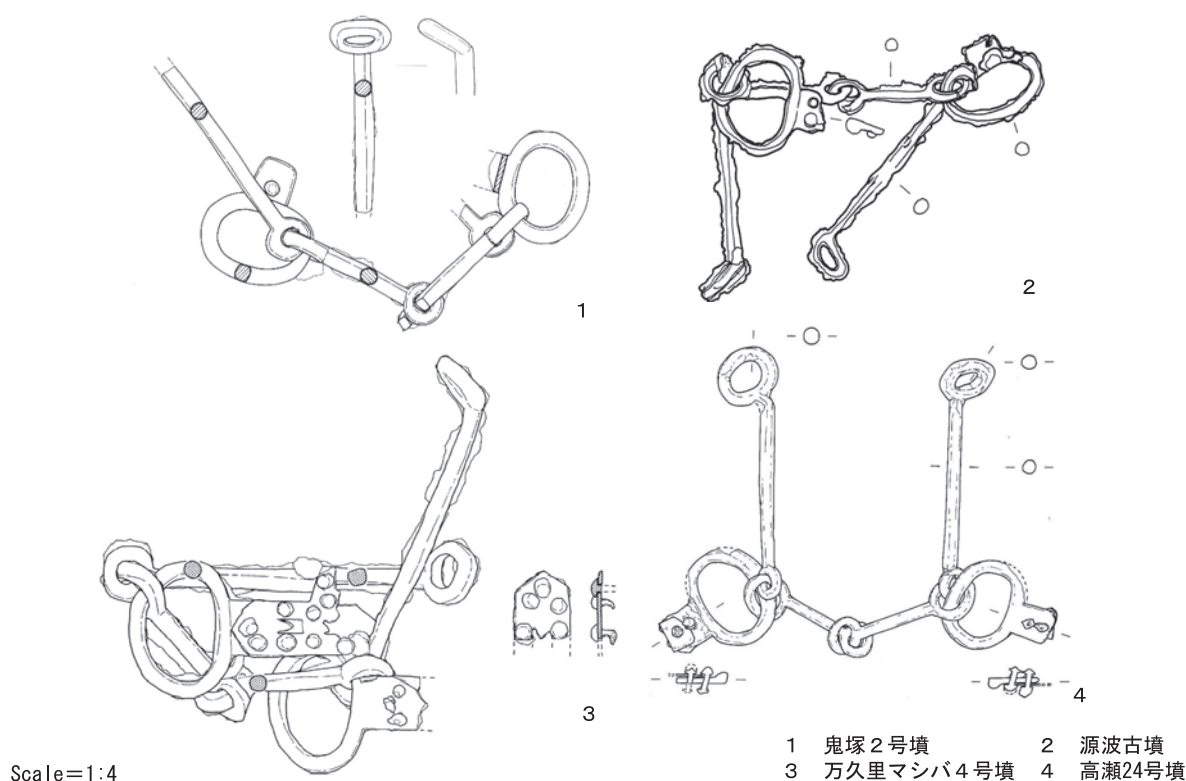
それでは以下に、それぞれの特徴を見ておこう（第1図）。

(1) 福岡県広川町鬼塚2号墳

古墳の特徴 周囲の改変が著しく、古墳の形状は不明である。埋葬施設は複室疑似両袖式横穴式石室で、全長5.65mである。TK209型式～飛鳥Ⅰ期。耳環5種6点（5人の埋葬か）、空玉6点、管玉1点、勾玉1点、滑石製白玉41点、ガラス丸玉94点、銀象嵌圭頭大刀2振（註4）、轡2点（註5）、金銅装四脚辻金具1点、金銅装五脚？辻金具（あるいは雲珠）1点、金銅装八脚半球形雲珠、金銅装飾金具、イモ貝製飾金具2点、鉸具、鐙吊金具、弓両頭金具、鉄鏃、刀子、須恵器が出土している（広川町教委1986）。

轡の特徴 立聞は隅丸方形で、立聞の中心に鉄地銀張の鉾が一鉾打たれている。立聞に他の金具は鉾留めされていないことから直接面繫のベルトを鉾留めしたと想定できる。

轡の構造は一残念ながら引手壺まで残存していないが引手は一条線引手、く字形引手壺で、二連銜、銜介在連結（註6）である。全高6.6cm、環の幅5.8～6.0cm、立聞幅



第1図 鉾留立間円環轡の類例（1：4）

2.0、2.2cmである。

なお、鬼塚2号墳から出土した轡は引手が2組分あることから2組存在する。辻金具・雲珠は革帯を留める責金具をもたないもので、宮代VI期（飛鳥Ⅰ期）に位置づけられる（宮代1993・1996a）。雲珠は中央に宝珠飾金具の有無の違いがあるが、後述する群馬県高瀬24号墳出土雲珠と類似している。

(2) 兵庫県養父市万久里マシバ4号墳

古墳の特徴 円墳、直径27m。左片袖式石室。TK209型式期～飛鳥Ⅰ期の築造。副葬品として、馬具（鞍金具・腹帯金具・鉸具・飾金具・辻金具）、大刀、鉄鏃、針？、須恵器、金銅製品などが出土している（関宮町教委1992）。金銅製品では鳩目金具、切羽などが出土しており、倭風大刀（頭椎大刀）と推測できる。

轡の特徴 轡は立間に別造のM字形・十字形の透彫が施された、辻金具が多数の鉾で鉾留めされたものである。轡は二連銜、一条線引手、く字形引手壺、銜介在型連結である。轡の大きさは全高が8.1cm前後、環幅が7.0cm、立間幅2.7cmである。

なお、馬具には辻金具と同様の技法で作られた吊金具が出土しており、吊金具が用いられるのは飛鳥Ⅰ期までで飛鳥Ⅱ期以降急速に衰退していくことから、吊金具で轡や杏葉を吊る技法から鉾留技法への過渡的な位置づけを与えられる可能性が高い。したがって、当轡は、古墳の築造時期と同様、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期に位置づけられる可能性が高い。

(3) 長野県箕輪町源波古墳

古墳の特徴 円墳、直径約20m。全長11.5mの左片袖式横穴式石室を内部主体とする。金銅装頭椎大刀を含む9振の大刀・短刀、100本近くの鉄鏃、刀子、耳環10種16点（10人分か）、4種の轡をはじめとする金銅装六脚半球形雲珠、金銅装辻金具、イモ貝製飾金具などの豊富な馬具、金銅装大刀、銅釧、玉類、須恵器・土師器など豊富な遺物が出土している（箕輪町教委1988、轡の写真：飯田市美術博ほか1997）。

4種の轡は、1点が今回検討する鉾留立間円環轡、2点が大型矩形立間円環轡、1点が鉸具造立間円環轡である。轡の法量に時期差が表れているとすれば、一番小さい鉾留

立間円環轡が4点の轡の中では最も新しい可能性がある。

轡の特徴 鉾留立間は方形横二鉾である。轡の特徴は、一条線引手、く字形引手壺、二連銜、銜介在型連結である。轡は全高6.0cm、幅6.1cm、立間幅2.4cmである。

なお、源波古墳出土馬具には半球形六脚雲珠、半球形辻金具5種7点、鞍4種?10点、鉸具多数、飾金具多数が出土しており、組合関係は明確ではない。前述した鬼塚2号墳、後述する高瀬24号墳の事例を考慮すると、半球形脚（1鉾）系辻金具がこの轡に伴う可能性が高い。

(4) 群馬県富岡市高瀬24号墳

古墳の特徴 円墳、直径30m。玄室長4.7m、羨道長2.5m以上、全長7.2m以上の両袖式石室。銀装銀線巻大刀ほか4振の大刀、金銅装鞍金具1組、鐙吊金具、金銅装辻金具、金銅装雲珠、銀装珥金具、両頭金具（図版では金銅装か銀装と思われる）、鉄鏃、須恵器など非常に豊富な遺物が出土している。ただし、埴輪が樹立されておらず、築造時期はTK209型式～飛鳥Ⅰ期であると考えられる（富岡市教委2000）。

轡の特徴 立間は方形縦二鉾の鉾留立間であるが、立間には別の金具の破片が鉾で留められている。これはおそらく辻金具の脚部片で、辻金具と立間が鉾で留められていた可能性が高い。轡は銜介在型連結、一条線引手、く字形引手壺、二連銜である。全高6.6・6.9cm、幅5.4・6.0cm、立間幅2.0、2.2cmである。

なお、高瀬24号墳から出土した馬具は現状で一組分のみであり、組合関係にあった可能性が高い。辻金具・雲珠は革帯を留める責金具をもたないもので、TK209型式期以降（宮代1993）に、鞍金具は「覆輪を伴わず磯と洲浜金具を別造にする系列（幅の広い縁金具を用いる）」（宮代1996b）に該当し、中でも鉾が大きいことから宮代Ⅵ期（飛鳥Ⅰ期）に該当しよう。したがって、轡もTK209型式期を上限とすることができ、飛鳥Ⅱ期まで下降する可能性もある。

(5) 鉾留立間円環轡の特徴

共通点と相違点 上記4例の共通点は、二連銜、一条線引手・く字形引手壺、銜介在型連結である点で、相違点は万久里マシバ例・高瀬例は別造の辻金具（あるいは吊金具）が立間に鉾留めされる一方、鬼塚例・源波例は直接革

紐が鉾留めされた可能性が高い。さらに4者ともに幅2cm前後の方形立間である点は共通するが、鉾数と鉾の並び（縦並び、横並び）が異なる。

編年的位置 この4例はいずれもTK209型式期～飛鳥Ⅰ期に位置づけられる可能性が高く、一部飛鳥Ⅱ期まで下降する可能性がある。

轡の大きさは、万久里マシバ例が全高8cm、幅7cmと大きく、源波が全高・幅とも6cm前後と小さい。円環轡の傾向として時期が新しくなると小さくなる点を考慮すれば、万久里マシバ→高瀬→鬼塚→源波の順が考えられよう。

辻金具・雲珠との組合関係 万久里マシバ4号墳例以外は、高瀬例、鬼塚例をみると責金具を伴わず一鉾で革帯に鉾留する半球形鉢無稜辻金具・雲珠（半円形脚（1鉾）系、宮代1993）と組合関係になる可能性が高い。

3 鉾留立間円環轡の成立

(1) 鉾留立間を用いる金銅装馬具～金銅装花形鏡板付轡・杏葉の変化～（第2図）

金銅装鏡板付轡・杏葉の飛鳥Ⅰ期以降の新しいものの中に鉾留立間のものが多数確認でき、この段階に一部の金銅装轡・杏葉を除いて、鉾留立間が一般化した可能性が高い。内山敏行氏によれば、心葉形鏡板付轡・杏葉などの金銅装鏡板付轡・杏葉は、大部分がTK217型式（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）期（内山編年Ⅴ期）に立間孔を有するものから鉾留のものに変化するが、中でも花形鏡板付轡・杏葉はTK209型式期（内山編年後Ⅳ期）に栃木県下石橋愛宕塚古墳などでいち早く鉾留立間が出現する（内山1996）。現段階では鉾留立間の出現は、この花形鏡板付轡・杏葉からと考えることができ、TK209型式期を上限とすることができる。

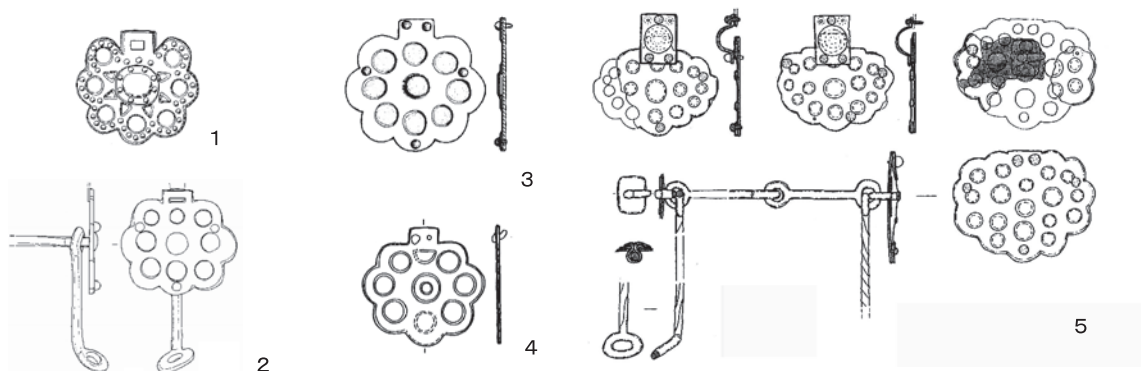
これ以前の内山編年後Ⅲ期（TK43型式期）には、雲珠の一脚に吊金具を鉾留めし、その吊金具で吊る花形杏葉が群馬県伊勢崎稲荷山古墳で確認されており（内山1996）、吊金具付小型矩形立間から鉾留立間へ変化していることが明らかである（小野山1983、内山1996）。

また、静岡県浜松市蜷塚1号墳（浜松市博物館1985）出土の花形鏡板付轡・杏葉は上記とは異なる留め方を用いる。杏葉は中央に半球形の膨らみをもつ飾金具と直接鉾留している。また、轡は立間を設けず、花形鏡板の上部に面繫の帯を直接鉾留している。これらは吊金具で吊るものから鉾留立間へ変化する過渡的な段階の馬具とすることがで

きよう。鏡板の型式は下石橋愛宕塚古墳のものよりも新しい段階（飛鳥Ⅰ～Ⅱ期）に位置づけられている。吊金具で吊るものから鉾留立間へ変化するにあたり、試行的な様相が窺えようか。

(2) 鉾留立間円環轡と関係すると想定できる円環轡

上述したように、金銅装馬具では吊金具を伴うものから、吊金具を辻金具や雲珠の脚に鉾留し、鏡板や杏葉を吊るすものへ、そして鉾留立間へ発展した可能性が高いことから、ここでは鉾留立間円環轡の成立と関係しそうな、吊



矩形立間を用いる。

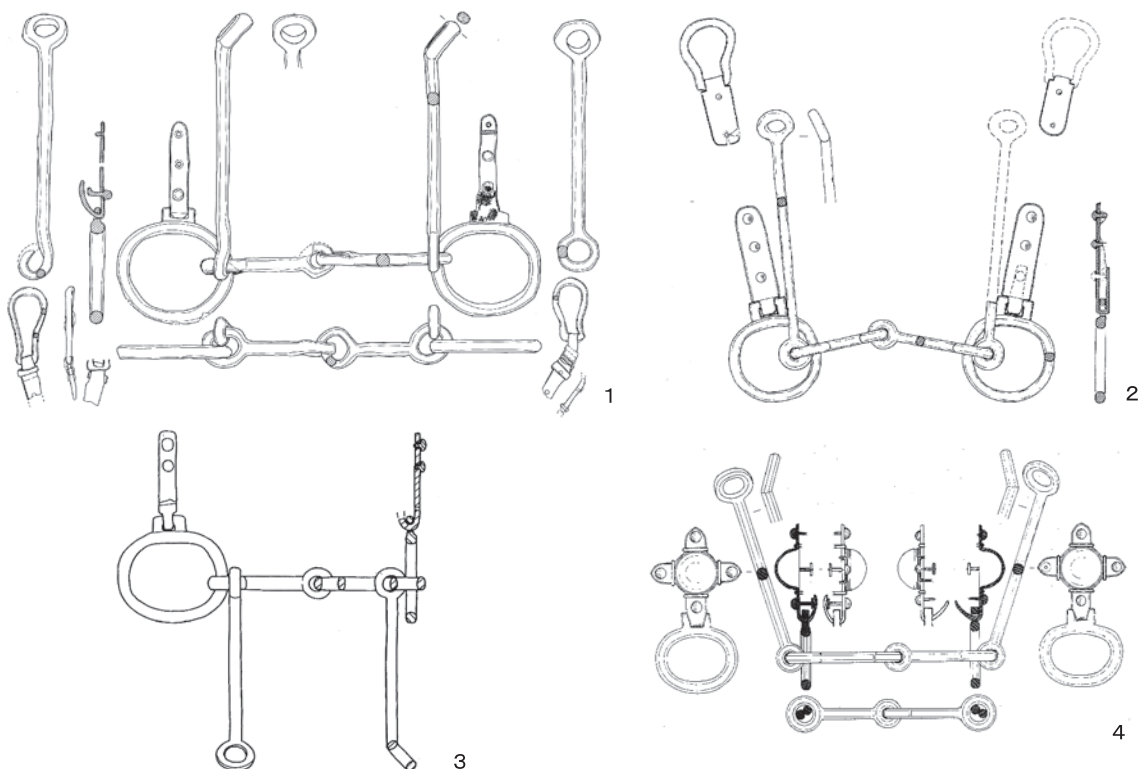
立間に直接鉾留めする。

半球形の突起を持つ方形飾金具を直接鏡板に鉾留めする
杏葉には立間がなく、鏡板の上部に直接鉾留するもの。

- 1 伊勢崎稲荷山古墳 2 竹原古墳 3 下石橋愛宕塚古墳
4 賤機山古墳 5 蜷塚1号墳

Scale=1:6

第2図 花形鏡板付轡・杏葉の立間の変化（中央が鉾留立間の初現例）



吊金具付小型矩形立間円環轡

- 1 石塚谷古墳 2 星の宮神社古墳 3 釣瓶落7号墳

吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡

- 4 ナシタニ6号墳

Scale=1:6

第3図 吊金具付小型矩形立間円環轡と吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡の事例

金具を有する円環轡についてみておきたい。

①吊金具付小型矩形立間円環轡（第3・4図）

管見によれば、日本列島で、北は茨城県ひたちなか市笠谷6号墳や栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳・下野市星の宮神社古墳から南は熊本県の玉名市小路古墳まで26古墳28例（第1表）が出土している。

この吊金具は「舌状吊金具」と呼称されることが多く、縦一列に2～3鈎の半球形の鈎頭の鈎で面繫の帯に留めるものである。立間は幅2cmほどである。福岡県菟が坂1号墳の遊環介在型連結を除いて銜介在型連結であり、時期的にはTK10型式期後半（MT85）～飛鳥Ⅱ期まで各時期において少数ながらも存在する（岡安1984）。

宮代栄一氏によれば、この轡には面繫装着用の「鉸具付舌状金具」が伴うことが多いとされる（第4図、宮代1997）。筆者が集成できた26古墳中11例に伴っており、非常に共伴率が高いといえよう。また、この轡に伴う雲珠・辻金具は、半球形鉢半円形脚（1鈎）系のもの（宮代1993・1996a）であり（雲珠＝26古墳中11例、辻金具＝26古墳中15例）、同時期に存在する半球形鉢半円形脚（3鈎）系のものなどとは組み合わせられない。したがって、吊金具付小型矩形立間円環轡は「鉸具付舌状金具」と半球形鉢半円形脚（1鈎）系の辻金具・雲珠との組合という規格性の高い馬装である。

また、大型矩形立間円環轡や鉸具造立間円環轡が盛行する中で少ないながらも継続的に一定数出土している点は注意する必要がある（註7、岡安1984）。

②吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡（第3図）

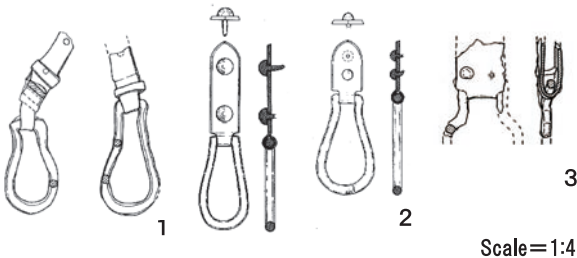
金銅装馬具ではTK43型式期以降に辻金具の一脚に吊金具を鈎留し、それで鏡板や杏葉を吊るものが確認できる。これと同じように、辻金具の四脚のうちの一脚が吊脚に作られ、それで鏡板を吊る円環轡（以下、吊脚辻金具付円環轡）が奈良県ナシタニ6号墳で出土している（樫考研1987）。この円環轡は矩形立間であるが立間幅が2cmと小さいもので、小型矩形立間円環轡に位置づけることができる。鏡板の大きさは、全高6.0cm、幅6.5cm、立間幅2.1cmである。

このナシタニ6号墳からは上述した吊金具付小型矩形立間円環轡とともに用いられることが多い「鉸具付舌状金

第1表 鈎留立間円環轡と吊金具付小型矩形立間円環轡の出土遺跡と共伴する雲珠・辻金具・「鉸具付舌状金具」

古墳名	所在地	轡形式	雲珠	辻金具	鉸具付舌状金具
高瀬24号墳	群馬県富岡市	鈎留	◎	◎	×
源波古墳	長野県箕輪町	鈎留		●	×
万久里マシバ4号墳	兵庫県養父市	鈎留	—	▲	○
鬼塚2号墳	福岡県広川町	鈎留	●	●	×
笠谷6号墳	茨城県ひたちなか市	吊小型	●	●	○
竹下浅間山古墳	栃木県宇都宮市	吊小型	◎	●	×
星の宮神社古墳	栃木県下野市	吊小型	●	●	○
文運古墳群	栃木県足利市	吊小型		◎	×
鶴巻古墳	群馬県伊勢崎市	吊小型		◎	×
伝・宮西塚古墳	埼玉県加須市	吊小型			×
ひさご塚古墳	埼玉県桶川市	吊小型			×
法皇塚古墳	千葉県市川市	吊小型	●・◎	◎	×
湯谷1号墳	長野県長野市	吊小型		●	○
柏木古墳	長野県松本市	吊小型		●	○
柏木古墳	長野県松本市	吊小型		●	○
釣瓶落7号墳	静岡県藤枝市	吊小型		●	×
西池ノ入4号墳	愛知県岡崎市	吊小型			○
石塚谷古墳	三重県多気町	吊小型	◎	◎	○
大垣内古墳	奈良県広陵町	吊小型			×
ナシタニ6号墳	奈良県高取町	吊小型		●	○
古天神古墳	島根県松江市	吊小型			
御崎山古墳	島根県松江市	吊小型	●	●	○
川島古墳	福岡県飯塚市	吊小型	●		○
竹原古墳	福岡県若宮町	吊小型	●・◎	●	○
菟が坂1号墳	福岡県岡垣町	吊小型			×
釘崎3号墳	福岡県八女市	吊小型			
小倉谷16-19号横穴墓前庭	福岡県八女市	吊小型	●	●	×
稲荷山横穴墓群2G	福岡県大任町	吊小型	◎		×
埴山古墳	熊本県御船町	吊小型			×
小路古墳	熊本県玉名市	吊小型	◎	◎	×
小路古墳	熊本県玉名市	吊小型	◎	◎	×
野原7号墳	熊本県荒尾市	吊小型			×

● 半球形鉢半円形脚（1鈎）系・宝珠飾なし
◎ 半球形鉢半円形脚（1鈎）系・宝珠飾あり ▲ 板状T字形 ○ 出土している
吊小型＝吊金具付小型矩形立間円環轡 辻小型＝吊脚付吊金具付小型矩形立間円環轡



- 1 石塚谷古墳（吊金具付小型矩形立間円環轡）
2 ナシタニ6号墳（吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡）
3 万久里マシバ4号墳（鈎留立間円環轡）

第4図 「鉸具付舌状吊金具」の類例

具」が出土しており、吊金具付小型矩形立間円環轡と同一系譜であることが明確である。ナシタニ6号墳例はTK209型式期に位置づけられる可能性が高いことから、吊金具付小型矩形円環状鏡板付轡から創出された轡と辻金具の馬装である。

③吊金具付大型矩形立間円環轡（第5図）

つづいて、吊金具を伴う大型矩形立間円環轡についてみ

ておこう。管見では5例を挙げることができる。

まず、「舌状吊金具」ではなく、幅広で二列に鉾が打たれる吊金具を伴う大型矩形立間円環轡が奈良県藤ノ木古墳(Cセット)から出土している(樫考研1990)。このような吊金具を伴う事例は管見ではこの事例のみで、「舌状吊金具」とは異なる吊金具を伴う大型矩形立間円環轡も存在することは明らかとなるが、継続的に生産されたかは明確ではない。

つぎに、埼玉県古凍14号墳周辺土壌は馬殉葬土壌と想定されるが、そのうち2・4号土壌から吊金具付大型矩形立間円環轡が1点ずつ出土している(東松山市教委1999)。報告によれば、2号土壌例が帯金具に別造の吊金具を鉾留し、その吊金具で円環轡を吊るもので、4号土壌例は、吊金具単独で円環轡を吊るものである。2者ともにTK209~TK217(飛鳥I期)型式期(7世紀第1四半期)ごろと想定している(東松山市教委1999)。2号土壌出土轡が、全高6.6cm、幅8cm、立間幅3.5cmで、4号土壌出土轡が、全高6.0cm、幅7.5cm、立間幅3.9cmである。

また、静岡県東平1号墳例(東海古墳時代研究会2006)は吊金具で直接円環轡を吊るものである。出土遺物には毛彫馬具に伴う方形に近い心葉形鏡板付轡、壺鐙などが出土

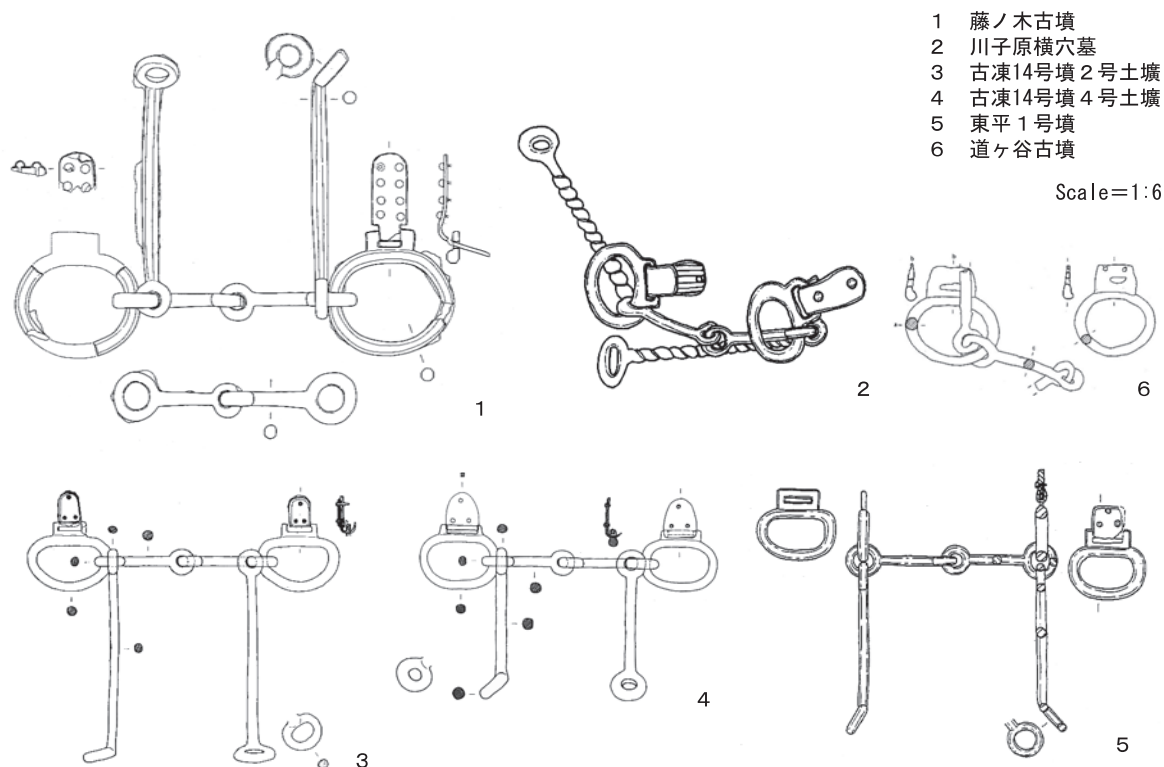
している。東平1号墳からはTK43型式期~飛鳥II期の遺物が出土しており、馬具もその範疇に位置づけることができる。

さらに、島根県川子原横穴墓例は、吊金具で直接円環轡を吊るものである。この横穴墓例では辻金具は出土しておらず、帯金具を駆使して面繫を構成したと考えられている(宮代1997)。

④立間に穿孔する大型矩形立間円環轡

ここでは大型矩形立間円環轡のうち通常のそれには確認できない特徴を有する愛媛県松山市道ヶ谷古墳例を挙げたい。道ヶ谷古墳(愛媛県埋文センター2000)例は、大型矩形立間上部に2小円孔が穿たれており、これは通常的大型矩形立間円環轡には確認できない特徴である。この孔は場所からみて、面繫の帯を鉾留するための鉾が打たれていたと推測されている。鏡板の大きさは、全高7.2cm、幅6.3cm、立間幅3.0cmである。なお、鏡板は2点出土しているが、穿孔が確認(報告)されていないほうが大きく、また立間孔も異なることから、2組の大型矩形立間円環轡が納められた可能性がある。

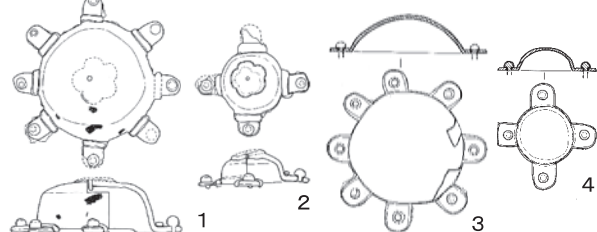
古墳の残存状況が良好ではないが、石室内からは飛鳥I



第5図 吊金具付大型矩形立間円環轡と立間に小円孔を穿つ大型矩形立間円環轡の事例

期に位置づけられる須恵器が出土しており、円環轡はその時期に位置づけられようか。

したがって、大型矩形立間円環轡の中に、TK43型式期（特にTK209型式期）以降吊金具で吊るものが少数ながら存在しており、さらには立間に孔を穿ち、面繫の帯を鉤留めしようとするなど、一部の大型矩形立間円環轡に金銅装轡・杏葉のように吊金具で帯金具に固定する方法や鉤を用いて帯を留める技法の採用がみられることにも注目すべきであろう。



1・2 石塚谷古墳

3・4 鬼塚2号墳

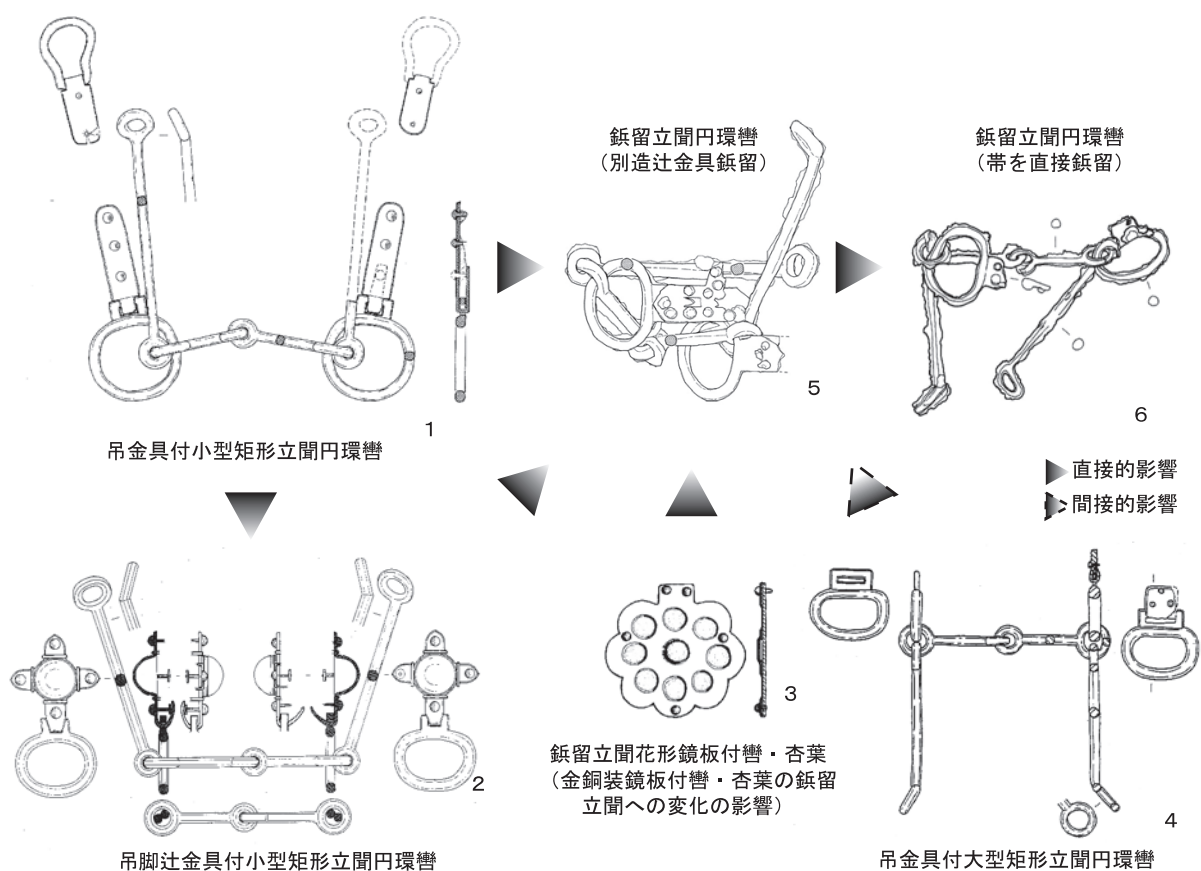
Scale=1:6

第6図 吊金具付小型矩形立間円環轡と鉤留立間円環轡に採用された雲珠・辻金具の比較

(3) 鉤留立間円環轡の成立過程

金銅装馬具の鉤留立間への変化は、吊金具単独→辻金具・雲珠の脚に吊金具を鉤留するもの、辻金具・雲珠の脚を吊脚にするもの→鉤留立間へと変化した蓋然性が高い。この金銅装馬具の面繫装着方法の変化の流れに従って、鉤留立間円環轡の成立に関係しそうな吊金具を伴う円環轡をみると、上記(2)で検討した4形式すべてが、鉤留立間円環

轡が位置づけられるTK209型式期～飛鳥Ⅱ期に存在している。つまり、鉤留立間円環轡はTK209～飛鳥Ⅰ期に成立した可能性が高いが、その成立に影響しそうなものは、ほぼ同時期かそれ以前に存在しているといえる。また、吊金具付小型矩形立間円環轡以外の3類型はTK209型式以降に位置づけられるため、この時期に鉄製轡のうち大型矩形立間系と吊金具付小型矩形立間系に面繫への装着方法に



鉤留立間円環轡はTK209～飛鳥Ⅰ期に成立した。

ただし、金銅装馬具に取り入れられたようには一般化せず、すぐに衰退。実用的な轡としては鉤留するだけの帯留は強度的に弱かった可能性が高い。

1 星宮神社古墳 2 ナシタニ6号墳

3 下石橋愛宕塚古墳 4 東平1号墳

5 万久里マシバ4号墳 6 源波古墳

Scale=1:6

第7図 鉤留立間円環轡の成立過程

大きな変化が起こっていた可能性が高い。これは金銅装馬具の変化に関連するものといえるだろう。

それでは鉾留立間円環轡に変化した、あるいは産み出したのはどの円環轡なのか。ここで、重要となるのが、宮代栄一氏が取り上げた小型矩形立間円環轡に共伴する「鉸具付舌状金具」である。この金具が万久里マシバ4号墳で出土している（註8）。これは吊金具付小型矩形立間円環轡と鉾の打ち方が異なるものの同一系譜と考えたい。

また、鉾留立間円環轡の立間幅をみると万久里マシバ4号墳例がやや大きく2.7cmであるが、それ以外は2cm前後で、立間幅からみれば大型矩形立間よりも小型矩形立間に近い。

また、吊金具付小型矩形立間円環轡とその系譜にある吊脚辻金具付小型矩形立間円環轡には、共伴率の高い組合関係にある、「半球形鉢半円形脚（1鉾）系」（宮代1993）の雲珠・辻金具が伴うが、これらが高瀬24号墳、源波古墳、鬼塚2号墳で共伴している（第6図）。

この3点から鉾留立間円環轡の成立にあたっては、第7図に示したように吊金具付小型矩形立間円環轡の工人集団が金銅装馬具の変化を受けて、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期に鉾留立間円環轡を創出したと考えたい（註9）。

一方で吊金具付大型矩形立間円環轡が無関係であったとも考えにくい。金銅装轡・杏葉でも心葉形鏡板付轡・杏葉などでは、大型矩形立間であったものが、鉾留に変化した段階で小型矩形立間と同じ幅になる事例もある。大型矩形立間円環轡が鉾留に変化する過程で小型・鉾留化した可能性も若干想定できるため、その間接的な影響は考慮しておきたい。

上述した後者の変化の可能性も含めても円環轡における鉾留立間の導入は金銅装馬具の変化の機微に対応しており、金銅装馬具生産に近い工人集団が生産に携わっていた可能性が高いといえよう。

(2) 鉾留立間円環轡の衰退

鉾留立間の金銅装轡・杏葉が盛行する一方で、鉾留立間円環轡は少数が生産されたものの、飛鳥Ⅱ期までには生産が終了した可能性が高い。また、鉾留立間円環轡出現以降、大型矩形立間円環轡は全国的に多数が出土していることから生産が継続的に行われていたと考えられるのに対し、鉾留立間円環轡の相形にあたと想定する小型矩形立

間円環轡はほとんど確認できなくなり衰退する。

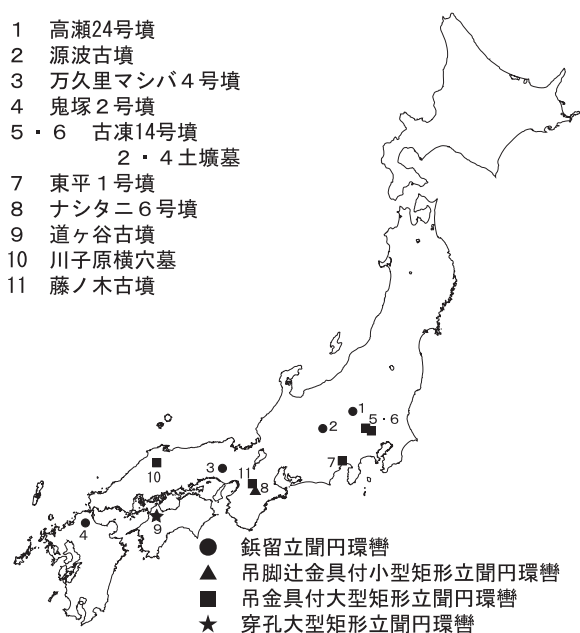
このように鉾留立間円環轡と（吊金具付）小型矩形立間円環轡が同時期に衰退する要因は、小型矩形立間円環轡から鉾留立間円環轡へ生産を移行させたこと、もともと生産数の少ない吊金具小型矩形立間円環轡の生産体制を引き継ぐことから鉾留立間円環轡の生産数が本来少なかったこと、さらに実用的な馬具とされることが多い円環轡において、立間孔を通さず面繫を鉾で固定するだけでは強度が弱かったことなどが考えられる。

つまり、金銅装馬具生産に近い位置にあった可能性が高い吊金具付小型矩形立間円環轡（大谷晃1996）の系譜にある鉾留立間円環轡は、試行的な生産に留まり、衰退したのであろう。

4 鉾留立間円環轡からみた古墳時代社会の特質

(1) 鉾留立間円環轡を保有する古墳の位置づけ

分布 鉾留立間円環轡について、吊金具付小型矩形立間円環轡（第1表）、またそれと関連する可能性が高い吊脚辻金具付小型矩形立間、吊金具付大型矩形立間、立間に孔を穿った立間をもつ大型矩形立間円環轡の分布図を示した（第7図）。それらは関東から九州まで散在しており、集中する地域はない。また、吊金具付小型矩形立間円環轡は第1表に示したように一古墳から複数例出土することはあっても全国的に散在し集中する地域はない。



第8図 鉾留立間円環轡と関係する円環轡の分布

したがって、これらの馬具は特定の地方での生産は考えにくい。上述したようにTK43型式期以降吊金具を有する轡は金銅装馬具の特徴であり、その影響が考えられることから、これらは畿内王権で生産され、地方へ配布された可能性が高いと考える。

階層的位置 鉾留立聞円環轡を有する古墳は、上記した鬼塚2号墳、万久里マシバ4号墳、源波古墳、高瀬24号墳の4古墳である。

この鉾留立聞円環轡は円環轡の中でも特異な轡であることから、他の円環轡に比べて相対的に階層的な位置づけが低いというわけではないと考える。

古墳の規模をみると、源波古墳は20mの円墳、高瀬24号墳は30mの円墳、万久里マシバ4号墳は27mの円墳であり、当該期としては群集墳中では規模の大きな古墳に位置づけられるだろう。鬼塚2号墳は金銅装馬具・象嵌装大刀、源波古墳は頭椎大刀、金銅装馬具などの豊富な遺物、高瀬24号墳は金銅装鞍金具、銀装大刀、銀装弭金具・銀装弓両頭金具、万久里マシバ4号墳は鳩目金具の存在から頭椎大刀等の倭装大刀が副葬されていた可能性が高い。このように4基それぞれに豊富な遺物が出土しており、群集墳中の1古墳という評価ではなく、群集墳の盟主的存在や、地域の小首長と評価できる。

少数であるにもかかわらず一地域に集中せず散在すること、地域の小首長墓から出土することなどからみれば、やはり鉾留立聞円環轡は地方で生産された馬具とはいえず、金銅装の雲珠・辻金具を伴うこと、金銅装鞍を伴う事例がある点などからも中央で生産され、各地域の中でも有力者層に配布された可能性が高いと考える。

(2) 鉾留立聞円環轡の成立の意義

鉾留立聞円環轡は、小型矩形立聞円環轡が金銅装馬具の鉾留立聞への変化の影響を受け、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期に成立した轡である可能性が高い。これは金銅装馬具の変化に機微に反応し、ほぼ同時期に変化した点が重要である。この反応の速さからみれば、この生産者集団が金銅装馬具の生産者集団に近い関係にあった可能性が高いと考える。

このTK209型式期～飛鳥Ⅱ期は、金銅装轡・杏葉におけるリベット留技法（小野山1983、松尾1999）や鏡板・杏葉の共造技法（桃崎2001）、鉾留立聞の採用（小野山1983、内山1996）など他形式に亘る技法の斉一化が進行

している時期でもあり、金銅装馬具生産における工人集団の再編が行われた可能性が高い。

こうした変化の中に鉄製円環轡の工人集団も組み込まれた可能性も高い。このことを補強するものとして今回取り上げていないが、轡の引手の振りが挙げられる。古墳時代後期後半（TK209型式）以降の金銅装轡において引手の振りが再現する。この引手の振りは円環轡では、基本的に大型矩形立聞円環轡と鉾具造立聞円環轡に採用されるもので、それ以外の形式の轡に採用されること非常に稀である（註10）。この技法の共有やこれらの馬具が金銅装馬具と組み合わせられることが多い点（大谷宏2006）を評価すれば大型矩形立聞と鉾具造立聞円環轡が金銅装馬具生産と近い関係にあった可能性が高い（大谷宏2006）。

今後さらに別の視点から詳細に検討しなければならないが、古墳時代後期後半の馬具生産の再編に伴い、大型矩形立聞円環轡、鉾具造立聞円環轡、吊金具付小型立聞円環轡など金銅装馬具の生産と近い関係にあった鉄製円環轡生産工人集団も再編に組み込まれたと考えたい。大型矩形立聞と鉾具造立聞円環轡での引手の技法（振り）の共有が行われたり、再編の影響で鉾留立聞円環轡が試作的に製造されたりした可能性を考えておく必要があるだろう。

このように類例数の少ない鉾留立聞円環轡であるが、古墳時代後期後半の社会変化の側面（馬具生産の再編）を表す重要な遺物であったのである。

さいごに

今回も1,100例以上に及ぶ円環轡の中の4例と特殊な事例を取り上げて積極的な評価を行った。あくまでも特殊な事例をやや強引に別の馬具との系譜関係を繋げたり、解釈を導いたりした今回のような評価は過大評価との批判は免れない。研究者のご批評願いたい。

なお、小論の執筆にあたり、文献探索・収集等でお世話になった。銘記して深謝いたします。

飯島哲也 北山峰生 鈴木一有 永井正浩

【補記1】

脱稿後、入手した花谷浩氏の論文（1986「素環鏡板付轡の編年と性格」『山陰考古学の諸問題』）に鉾留立聞円環轡が確認できることが指摘され、吊金具付小型矩形立聞円環轡に類似することが指摘されていたことを知った。しか

し、鉾留立聞円環轡は一例のみの指摘に留まり、系譜関係など詳細には論じられていないため、筆者の意見に大きな変更は生じない。

【補記2】

脱稿後、愛媛県で上述した道ヶ谷古墳では、拙文で取り上げたもう一方の円環轡の立聞にも円孔が穿たれていたこと、また小型矩形立聞円環轡の立聞に穿孔が確認されたものがあることを知った（大野義人2008「環状鏡板付轡についての基礎的研究」『下條信行先生退任記念論文集』）。立聞に穿孔を行う馬具については伊予を中心に分布する可能性が高く、直接的に鉾留立聞の成立に影響を与えていた可能性は低くなったと想定している。

註

1 類例が少ないこと、また遺物が特に豊富な古墳から出土する事例がないことから目に触れる機会が少なく、これまで環状鏡板付轡を分類し、体系的にまとめられた、荒川史氏（荒川1987）、花谷浩氏（花谷1983）、岡安光彦氏（岡安1984）、坂本美夫氏（坂本1985）、宮代栄一氏（宮代1998）の公刊された分類からは漏れているのが現状である。

2 小論では、陶邑田辺編年に、飛鳥編年を併用する形で用い、「TK209型式期～飛鳥Ⅱ期」のように表記する。なお、飛鳥Ⅰ期は広義のTK209後半～TK217古段階にあたると考えている。ここではTK209とした場合は飛鳥Ⅰ期を含まない。

3 このほか栃木県足利市文選古墳群出土品（足利市教委1997）の中（隣接する赤城神社所蔵品とされるもの）に、その可能性がある個体が見受けられるが、通常の矩形立聞の立聞孔が錆で埋まっている可能性もあり、断定はできない。

また、（伝）群馬県出土（群馬県古墳時代研究会1996、南山大学所蔵）、長野県松本市柏木古墳出土の立聞が細くて長いものが存在する（長野県1983）。特に後者には先端に鉾が確認できることから吊金具付小型矩形立聞円環轡の可能性が高い。前者も筆者は詳細が確認できなかったが、柏木古墳同様吊金具付小型矩形立聞円環轡の可能性が高いと考えている。

4 銀象嵌圭頭柄頭2点とするか、1点を柄頭、1点を靱尻金具とする意見があり、大刀は圭頭大刀2振か、圭頭大刀1振・大刀1振の可能性もある。

5 引手壺が3点存在しており、最低2点の轡が副葬されていた可能性が高い。また、蕨手状に曲げられた金具があり、これが引手壺だとすれば、3点の轡が副葬されていたことになる。

6 小論では、銜先環に鏡板・引手を装着するものを、「銜介在型連結」と呼称する。また、鏡板に引手・銜先環を装着するものを「鏡板介在連結」、遊環に鏡板・引手・銜先環を連結するものを「銜介在型連結」とする（大谷宏2006参照）。

7 小型矩形立聞円環轡については別稿にて検討する予定

にしている。

8 ただし、小型矩形立聞円環轡に用いられる「鉾具付舌状金具」は縦一列2鉾であることが多いが、万久里マシバ4号墳例は縦二列であり、それらとは異なる。このような横二列の「鉾具付舌状金具」は静岡県牧之原市仁田山ノ崎古墳（川江1992）、福島県白河市筑内37号横穴墓（桃崎2002）で出土しており、両者に共通するのは、棘葉形杏葉である。なお、この2古墳では小型矩形立聞円環轡は出土していない。

また、万久里マシバ4号墳以外の鉾留立聞円環轡出土の3古墳はこの金具をとまっておらず、この事例のみでは根拠が薄いと批判も免れないが、万久里マシバ4号墳の「鉾具付舌状金具」を最大限評価して、小型矩形立聞円環轡との関連性を想定したい。

なお、小型矩形立聞円環轡の可能性が高い轡が出土した奈良県烏土塚古墳（奈良県教委1972）では、T字形の辻金具が出土している。当古墳では馬具が3組以上出土していることからこの辻金具がどの轡に伴うのか不明確であるが、万久里マシバ4号墳例からは小型矩形立聞円環轡に伴う可能性が高い。このようにT字形辻金具と小型矩形立聞円環轡が組合せ関係にある可能性がある点も小型矩形立聞から鉾留立聞円環轡が成立したとする筆者の考えを補強する。

さらに、仁田山ノ崎古墳、筑内37号横穴墓の馬具の共伴事例からは、万久里マシバ4号墳例の生産者は、それと同じ「鉾具付舌状金具」を伴うことから、金銅装馬具の生産に近い位置にいた可能性が高いといえる。

9 鉾留立聞円環轡が4例と少数で、出土古墳も分散し、鉾留の特徴も画一的ではないことから、それぞれが別個の系譜のなかで成立したとの見方も成り立つだろう。

しかし、上述した3つの理由から、鉾留立聞円環轡の成立にあつては、吊金具付小型矩形立聞円環轡に、金銅装馬具の影響でナシタニ6号墳例のような吊脚辻金具付小型矩形立聞円環轡が現れ、さらに花形鏡板付轡・杏葉などの金銅装馬具の鉾留立聞への変化の影響を受けて、鉾留立聞化したと考えたい。

なお、藤ノ木古墳出土幅広い吊金具付小型矩形立聞円環轡は、舌状吊金具付小型矩形立聞円環轡と吊金具が異なるだけでなく、雲珠・辻金具も半球形脚（3鉾）系であること、时期的にも1段階古いことから、鉾留立聞円環轡の成立に直接的な影響を及ぼしていないと考えている。

10 筆者が集成した円環轡約1,100例中、61例に振り（強振り、岡安1984、岡安氏のいう「江田船山型端環装飾」は系譜が異なる可能性が高い〈大谷宏2008〉ため除く）が確認できる。大型矩形立聞円環轡では19例、鉾具造立聞円環轡で34例であり、この2者で約86%を占める（この他、不明6例、兵庫鎖素環円環轡1例、素環円環轡1例である）。筆者が遺漏した分を含めてもこの傾向は大きくは変化しないと考える。したがって、この2者が引手の振りを主体的に採用したといえ、金銅装轡での振りの再現とも时期的に重なるため、同一契機による採用と考えている。

参考文献

【論文・図録等報告書以外】

荒川 史 1987 「環状鏡板付轡の問題点」『京都府埋蔵文

化財論集』1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
飯田市美術博物館・飯田市上郷考古博物館 1997 『伊那谷の馬 科野の馬』

岩原 剛 2009 「今下神明社古墳出土の馬具」『豊橋市美術博物館研究紀要』16号 豊橋市美術博物館

内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

大谷晃二 1996 「総括 1 副葬品とその時期」『御崎山古墳の研究』島根県教育委員会・八雲立つ風土記の丘資料館

大谷宏治 2006 「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会

大谷宏治 2008 「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40号 静岡県考古学会

岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会

岡安光彦 2003 「馬具生産と流通の諸画期」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

小野山節 1983 「花形杏葉と光背」『MUSEUM』383号 東京国立博物館

片平雅俊 1999 「馬具の集成をおえて」『茨城県史研究』82 茨城県

川江秀孝 1992 「馬具」『静岡県史』資料編3 考古3 静岡県

群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』

坂本美夫 1985 『馬具』ニュー・サイエンス社

鈴木一有 2008 「馬具」・「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所

東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』

花谷 浩 1983 「馬具」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会

松尾光晶 1999 「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター

宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』30号 埼玉考古学会

宮代栄一 1996a 「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』八雲立つ風土記の丘資料館

宮代栄一 1996b 「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』9号 肥後考古学会

宮代栄一 1997 「古墳時代の面繫構造の復元」『HOMINIDS』1号 CRA

宮代栄一 1998 「古墳文化における地域性」『駿台史学』102号 駿台史学会

桃崎祐輔 2001 「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『先史学・考古学研究』12号 筑波大学

桃崎祐輔 2002 「筑内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『研究紀要2001』福島県文化財センター 白河館

横穴式石室研究会 2007 『近畿の横穴式石室』データベース

【報告書・県史等】

足利市教育委員会 1997 『文選第11号墳発掘調査報告書』

愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000 『道ヶ谷古墳 池の奥遺跡 平田七反地遺跡』

榎原考古学研究所 1987 『与楽古墳群』

榎原考古学研究所 1990 『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』

関宮町教育委員会 1992 『万久里マシバ古墳群』(兵庫県)

多気町教育委員会 1998 『多気町文化財調査報告』7 (三重県)

栃木県教育委員会 1986 『星の宮神社古墳・米山古墳』

栃木県 1984 『栃木県史』資料編考古2

富岡市教育委員会 2000 『高瀬24号古墳』

長野県 1983 『長野県史』考古資料編 全1巻 (3)

奈良県教育委員会 1972 『烏土塚古墳』

浜松市博物館 1985 『蜷塚遺跡V・VI』

東松山市教育委員会 1999 『古凍14号墳 (第1・2次)』

広川町教育委員会 1986 『鬼塚古墳群』(福岡県)

箕輪町教育委員会 1988 『源波古墳発掘調査報告書』(長野県)

若宮町教育委員会 1975 『金丸古墳』(福岡県)

なお、本文中に引用しなかった報告書については割愛いたしました。ご容赦ください。

図の出典

第1図 1 (広川町教委1986) 2 (箕輪町教委1988)
3 (関宮町教委1992, 横穴式石室研究会2007)
4 (富岡市教委2000)

第2図 1 (岩原2009) 2 (若宮町教委1975)
3 (栃木県1984) 4 (川江1992)
5 (浜松市博1985)

第3図 1 (多気町教委1998) 2 (栃木県教委1986)
3 (東海古墳文化研2006) 4 (榎考研1987)

第4図 1 (多気町教委1998) 2 (榎考研1987)
3 (関宮町教委1992, 横穴式石室研究会2007)

第5図 1 (榎考研1990) 2 (宮代1993)
3・4 (東松山市教委1999)
5 (東海古墳文化研2006)
6 (愛媛県埋文センター2000)

第6図 1・2 (多気町教委2006)
3・4 (広川町教委1986)

第7図 1 (栃木県教委1986) 2 (榎考研1987)
3 (栃木県1984) 4 (東海古墳文化研2006)
5 (関宮町教委1992, 横穴式石室研究会2007)
6 (箕輪町教委1988)

第8図 筆者作成

(2010. 3月稿了)

Meaning of the Horse Bit with Ring-Cheekpieces with Riveted Tachigiki

Hiroshi OOYA

Summary: Some iron horse bits with ring-cheekpieces have riveted Tachigiki. The riveted Tachigiki were firstly used with pieces of gilt bronze bit, such as flower-shaped cheekpieces and harness pendants. Then, they were introduced into iron horse bits such as the horse bit with ring-cheekpieces of small rectangle Tachigiki. Creation of horse bits with ring-cheekpieces of riveted Tachigiki started in the beginning / first half of 7th century. That corresponds to reorganization of gilt bronze harness production. With regrouping of harness makers, craftsmen of bits with cheekpieces were reorganized, and then, some of the craftsman could work with gilt bronze harness makers and learn riveting technique and then, create horse bits with ring-cheekpieces of riveted Tachigiki.

Keywords: horse bit, cheekpieces, riveted Tachigiki (fastener of the bit to the headstall), harness pendant